

## 三陸地域の自然公園等を活用した復興の考え方（骨子）

- 1．基本的考え方
- 2．三陸復興国立公園（仮称）構想
  - （1）三陸復興国立公園（仮称）
  - （2）長距離自然歩道
  - （3）エコツーリズム
  - （4）調査・モニタリング
  - （5）民間とのパートナーシップ
- 3．環境モデル地域
  - （1）森・里・川・海をつながりを通じた自然共生社会
  - （2）再生可能エネルギーの活用方策
  - （3）リサイクル資源を用いた自然環境の創造

## 【事務局注】

上記項目については、事務局において再整理を行った

以下の本文については、これまでの中央環境審議会自然環境部会における議論、事務局が審議会委員にヒアリングを行った内容、東日本大震災からの復興の基本方針（平成 23 年 7 月 29 日東日本大震災復興対策本部）を中心に取りまとめた

以下の本文のうち、下線部は前回（10 月 26 日）の中央環境審議会自然環境部会において発言があり、追加したもの

## 1. 基本的考え方

東日本大震災により自然環境には、恵みだけでなく、脅威の面があることを改めて気づかされたことから、自然の持つ二面性をとらえ、「自然への畏敬の念を学ぶ」ことができるようにすることが必要

災害の教訓を、自然の仕組みや成り立ちから理解し、環境・防災教育として活用したほうがよい

生物多様性の保全や自然と共生する社会の構築に寄与する視点を盛り込むべき。このことは、愛知目標の達成に向けて、具体的な姿を提示することにつながる

国立公園は国民が利用し、楽しむための財産であり、国民のために国立公園が存在している。国民に優れた自然環境の価値、国立公園そのものの価値を共有してもらうためには国立公園の利用を促進したほうがよい

国立公園の利用の促進による観光振興を通じ、地域の産業の発展に寄与することで、地域の復興に貢献すべき

地域の豊かな観光資源を活用した東北ならではの観光スタイルを構築することが必要であり、文化、歴史、生活、技術といった文化的景観を評価・活用するとともに、自然と人間の関連、自然との付き合いを象徴することを目指したほうがよい

国立公園として再編成する区域外との連携として、森・里・川・海のつながりを意識した、内陸部分との結びつきがあるネットワークを構築したほうがよい

地震・津波により失われた自然環境と、今後新しく形成される自然環境の双方を把握したほうがよい

岩手県を中心に検討が進められているジオパークに関する取組と連携するとともに、過去繰り返された津波の歴史も含めた、災害の遺構、地震・津波の痕跡の保存、津波が来た高さを表示することなどができるとよい

復興に関しては、短期的に取り組む内容と、中期的・長期的に取り組む内容に分けて、段階的に考えていくべき

東日本大震災による被害のレベルは地域によって様々であることから、地域ごとのきめ細かい計画を立てるべき

地域の方々や市町村と十分に相談した上で進めたほうがよい

取組を進めるうえで、他省庁が取り組む施策と連携し、効果を高めていくことを検討すべき

## 2. 三陸復興国立公園（仮称）構想

### （1）三陸復興国立公園

再編成する国立公園としての景観を評価するにあたって、代表性及び傑出性について、時代の要請する風景評価の変化を踏まえて、整理することが必要

今回、公園区域として再編成する区域は、さしあたっては現在の自然公園区域を基本として行うことが必要

地域の人々の持続可能な暮らし・生産活動が、国立公園の維持管理及び生物多様性の保全に大きく貢献するという視点を入れたほうがよい

人々の生活の営みや産業の上に文化が蓄積され、風景が形成されていくことから、国立公園の中で生活する地域の人々の国立公園の利用と保全へのかかわり方について検討したほうがよい

公園計画の変更などについては、復興の段階に合わせてフレキシブルに対応していくことが必要

国立公園等の利用施設を整備する際は、避難場所を確保するとともに、さらに高台にまで行ける避難経路の確保したほうがよい  
国立公園等の利用施設の中には、災害時にも役立つものもあるので、その整備を推進したほうがよい

### （2）長距離自然歩道の新設

沿岸の自然と生活・産業・文化をつなぐ路線を設定したほうがよい

災害時には、住民や観光客の防災避難路として活用できる路線を設定したほうがよい

津波の経験を語り継ぐために、被災を記録し、学びの場として活用できる路線を設定したほうがよい

### （3）エコツーリズム

さっぱ船の活用など、漁業者によるエコツーリズムの取組を推進することが農林水産業との連携を進めるうえで必要

三陸沿岸地域の生物生産性が高く、多種多様な魚介類が生息し、漁獲量が多い理由が、地形、海流、気象条件等に大きく影響を受けていること、野生生物であり、水産物・食糧でもある魚類の生態、生活史などを、エコツーリズムの中で解説していくようにし

たほうがよい

( 4 ) 調査・モニタリング

地震・津波による変化状況を把握し、経年変化状況のモニタリングを行うことが必要

地域における持続可能な利用を図る際に、地域で活動する主体と情報を共有し、議論するための自然環境の調査・モニタリングデータを取るようにしたほうがよい

調査・モニタリング結果の情報を保存し、共有及び公開するための体制を整備したほうがよい

( 5 ) 民間とのパートナーシップ

国立公園は地域の魅力を伝えるプラットフォームとして重要であり、これを通じて地域再生や地域活性化に貢献していくためにも、民間とのパートナーシップを構築する取組を進めたほうがよい

パートナーシップの構築を進めるうえで、企業の CSR 活動のみならず、幅広く企業の事業や支援を集めるほうがよい

企業の活動以外にも、ボランティアや寄付の受け入れ態勢の構築、博物館、研究所、第一次産業、ナショナルトラスト活動などと連携できる体制を構築したほうがよい

3 . 環境モデル地域

( 1 ) 森・里・川・海をつながりを通じた自然共生社会

生物多様性保全に寄与する視点として、生態系ネットワークの基盤・供給・調整・文化的サービスの面に着目し、水・物質の循環や人のつながりを意識したうえで、つながりを取り戻すことが必要

森・里・川・海へと流れる縦のつながりのほかに、岩場と干潟と藻場などの生態系の横のつながりも考慮したほうがよい

新たな開発の際に、森・里・川・海をつながりを意識し、自然環境への影響が少なくなるように努力したほうがよい

地震・津波後の湾内の水循環、栄養塩類、植物プランクトン、海底地形の変化を調査するとともに、ヘドロがなくなったことも踏まえて、環境収容力を調べたほうがよい

海洋保護区のあり方は、既に地域で取り組まれている保護活動を

考慮するなど、漁業者にとっても開発から守る必要性が高い海域について、地域ごとに協議し、検討を進めていくべき

地震・津波により破壊された場所又は創出された環境において自然再生の取組を検討すべき

地域からの自発的な提案がある場合は、地震・津波の影響を受けた海岸林、放棄された農耕地、住宅地等を、自然に戻していく自然再生の取組を推進することが考えられる。特に、小流域単位で放棄された場合は、自然環境の再生による森・里・川・海のつながりの再生、エコツーリズムフィールドとしての活用を目指すことが検討できる

津波により沿岸部の自然が改変され、潟湖が出現するなど、開発前の状態に戻っている場所がある。自然の推移に任せ、防潮堤はその内陸側に作るといったことを検討したほうがよい

地域に根ざした自然との共生の知恵を活用していくことが必要  
FSC、SGEC といった認証材を活用したほうがよい

#### ( 2 ) 再生可能エネルギーの活用方策

流域の木材をバイオマスとして活用したほうがよい

エネルギーの地産地消の観点から、再生可能エネルギーと協調した取組を進めたほうがよい

#### ( 3 ) リサイクル資源を用いた自然環境の創造

災害廃棄物を分別し、安全なリサイクル材料として活用し、被災した国立公園の利用施設の復旧、新規整備に活用したほうがよい